

スポーツタレントの発掘とその育成法の
国際比較研究

高岡 享 寺島 善一

The Comparative Study of the Selection and Development of Talent in Sport

— Between Europe and Japan —

Toru TAKAOKA Zenichi TERASHIMA

Abstract

The comparative study of the selection and development of talent in sport has gained increasing importance in these ten years. Because the competition at almost all levels has intensified.

The structure of this study is concerned with the selection and development of young people talented in sport between U.K., former D.D.R, F.D.R, Soviet Russia and Japan.

First of all, we researched about outline some useful examples of selection procedures already existence in U.K, D.D.R, G.D.R, U.S.S.R, and Japan.

Secondly, we analyzed a variety of factor which impinge upon the establishment of a variety system of selection and development in sport.

Thirdly, we gave some critical coments for the system of selection and development in sport which are concerend with the importance of young people's basic growth, health and fitness.

Finally, we had some conclusion about the selection and development in sport, and we found the need for more research.

- (1) the importance of longitudinal data.
- (2) the generation of more valid tests for the identification of talent in sport.
- (3) research into psychological and sociological correlates of giftedness in sport, including the notion of "moter intelligence".

《共同研究》

スポーツタレントの発掘とその育成法の 国際比較研究

高 岡 享 寺 島 善 一

問題の所在

- I スポーツタレントの発掘・育成の国際的潮流 —— イギリス・ドイツを中心に ——
 - 1 スポーツタレントの発掘・育成のシステム
 - (1) イギリスにおけるスポーツタレントの発掘・育成のシステム
 - (2) ドイツにおけるスポーツタレントの発掘・育成のシステム
 - (3) その他の諸外国におけるスポーツタレントの発掘・育成のシステム
 - 2 スポーツタレントの発掘・育成にかかわる諸問題 —— 諸外国の制度を省りみて ——
 - (1) スポーツタレントの評価・選抜方法
 - (2) スポーツタレントの育成に関する社会的・教育的諸問題
- II 日本におけるスポーツタレントの発掘・育成
 - 1 日本陸上競技連盟におけるスポーツタレントの発掘・育成の方法とシステム
 - 2 日本体操競技連盟におけるスポーツタレントの発掘・育成の方法とシステム

問題の所在

「スポーツ」が人間の生活の「文化」として定着する様式・過程は多岐に渡っている。

「スポーツ」を実践し、その喜びを追求するという姿勢の中にも、多様な姿勢が見うけられる。その一つは、チャンピオンシップをあくまで重視し、スポーツの技能の極限まで追求しようとする人々の集団が存在する。これらの人々は、それぞれのスポーツにおいて、相対的卓越性を追い求める中で、自らのスポーツ技術の「質的」発展向上を目指そうとしている。これらの人々が組織されている競技団体も、世界選手権、オリンピックゲームという、自らの存在を主張する場を求めて、日夜、その「競技力」の向上を目差している。それらの各種の競技の世界選手権・オリンピックゲームは、ただ単に、それらの競技団体の力の発揮の場というのみに留まらず、今日では、メダルの多さがある種の「国威発揚」に継がると考える国々も出現してきている。これらの国々においては、このスポーツの「競技力」の向上という課

題は、国家の重要な政策として位置づけられているし、その為の選手の発掘・育成はその競技団体の生命線ともなっていて、懸命の努力が続けられている。競技によっては、その競技至適年齢が若年化しているが故に、青田狩りとも言えるほど、若い年代に、そのスポーツタレントの発掘の目が向けられている。しかし、そうした傾向については、少なからず問題が存在している。一つは、そのスポーツが能力があると診断され、そのスポーツに没入してゆく児童・生徒らの、人間としての全人的発達はどうようにして保障されるのかということである。首尾よく、その競技で世界の頂点を極めたとしても、その後数十年に経る人生はどうなるのか？またさらに、競技生活の途中で「ドロップアウト」をしたり、「燃えつき」てしまったら、彼らの発育発達はどうなってゆくのか？

さらに、そうだからと言って、スポーツで栄冠を勝ち得たものに対して、国家で彼らの生涯を、年金という形で支えることが是なのか、非なのかという問題も存在する。

このような多様な問題を抱えた、「スポーツタレントの発掘・育成」課題を国際的潮流と日本とを比較しながら分析しようというのが本研究の狙いである。

しかし、言うまでもないことであるが、スポーツタレントを見事に開花させ、我々国民の前で披露してくれる、人間の業とも思えない「スポーツパフォーマンス」は、見る人をして感動せしめてくれる。このことは、スポーツを鑑賞の対象として、このスポーツ文化を享受しようとしている人々にとっても重大なことである。より良い、より質のいい、スポーツ文化を国民に提供するということになるのである。故に、このスポーツタレントの発掘・育成という課題は、ただ単に、競技団体やそれによって国威を発揚しようとする人々たちだけの問題ではなく、「国民」としても関心のある課題でもあるのである。

I スポーツタレントの発掘・育成の国際的潮流

1 スポーツタレントの発掘・育成のシステム

(1) イギリスにおけるスポーツタレントの発掘・育成のシステム

イギリスの学校教育制度の中では、特に秀でた能力を保持する子供らに対して「発掘」「選別」そして「育成」というシステムは、芸術音楽に関する能力を開発するメニューヒン・スクールやロイヤルバレエスクールを除いては存在していない。故に、子供達のスポーツタレントを全国的に調査し、特定の学校に収容し、選手を育成するというシステムは、イギリスには存在しない。体育教師が行う課外指導や、スポーツクラブが主催する子供向けプログラムや、競技団体が特別に組織する年令別チームの編成等が、才能を持った子供の育成プログラムのすべてである^(註1)。その他、14才を過ぎた子供達にむけた私立のミルフィールドスクールや、昨今その名声を増したタビストックにある水泳のためのケリーカレッジが、子供達のスポーツタレントの育成に一役買っている^(註2)。競技団体の側でも、1983年にローンテニス協会が宿舍付の学校を開設し、さらにフットボール協会は、1984年にリレシャルにGMの援助

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

でフットボールスクールを設立した^(註3)。

イギリスにおいてスポーツタレントの早期発掘・育成を控えめにしている根拠は何なのか？その考え方の背景を、ヨーロッパ評議会が作成した、子供たちのスポーツについての勧告文に見い出すことが出来る。「12才以下の子供らをスポーツスペシャリストにすることは、子供達の発育発達に関する生物学的結論が欠けている現状においては、望ましくない^(註4)。」

このような状況の中で、イギリスにおいては、スポーツタレントの優秀な子供達の育成という課題は、中学生以上を対象として行なわれることになっていった。その方法は、各地方自治体、(例えばロンドン市教育委員会)の指導で作られた、地域のスポーツタレント優秀者の指導を行う「センター」を中心にするものであった。このセンターこそが実質的な、スポーツタレントを持つ子供達への指導、育成の場となった。これらのセンターには、カレッジや総合大学、教育大学などの設備の整った施設が提供されたので、その成果は順調に現われてきた^(註5)。

このような状況を、クリントン・セイヤーは要領よく説明をしている。――

「ここに、第一級のコーチ機能が提供され得る『特別に選抜された子供たち』のための特別なセンターが形成され、将来に向けて発展する方策が設定された。より多くの地方自治体は、活動的な専門的コーチやアドバイザーを雇用することが出来るであろう。何種目かのスポーツについては、良い設備とスタッフを持った特別なスポーツの為の学校が出現し、教育大学や総合大学に第一級の施設と指導者を持った地域のスポーツ能力優秀者のためのセンターを、より多く設置することが出来る。ロンドン、マンチェスター、サザンプトン、ゴベントリーなどの都市においては、優秀なスポーツタレントを持った子供達のための秀れた計画が設定され、第一級の教育が第一級の施設の中で受けられることになった。コベントリーにおいては水泳指導計画1973年が示され、その後10人以上の国際的水泳選手を輩出した^(註6)。」

このようにイギリスにおいては、スポーツタレントを持った若者達の発掘・育成という課題については、他の分野における才能優秀者たちと同様に、完全に不適切で、調和した方策はない。スポーツタレントを持った若者達のための育成計画は、十分に検討された計画であるというよりむしろ、偶然性に依拠していることが多い。より決定的な立ち遅れは、より豊かな、より充実したプログラムを策定することによって、成長すべきスポーツタレントを持った若者達の才能を開花させるという、将来を展望した「研究計画」が存在しないことである。特に、スポーツタレントを持った子供達の育成については、他の芸術・音楽などの分野における才能を持った子供達の指導法もそうであるが、完全に不適切で、両親などの努力に負うところが多い不十分なものであった。このような状況におかれた理由の一つには、より豊かな、充実したプログラムを策定し、スポーツタレントを持った子供達を周到な計画のもとで育成するという「案」が欠けていたことにある。特に、スポーツタレントを持った子供達の育成という課題は、ただ単に、子供らに選抜テストを課して、発掘すればいいというのではなくて、子供達らの身体的発達の状況と平行して、心理的発達なども考慮されなけれ

ばならないし、さらに、子供の発育発達の教育学的・倫理的観点からも検討をする必要性がある。イギリスにおける伝統的教育思想から見れば、ひと握りの子供らを、スポーツ能力が優秀だからといって、その能力の発達のみを追求するという、アンバランスな教育姿勢は、社会には容易に受け入れ難い傾向がある。さらにスポーツタレントを発掘する、その方法についても、十分な科学的根拠が提示されていない。例えば、子供の発育が早熟型なのか晩成型なのかをどう認知するのか？とか、何才ごろからトレーニングを課し、その負荷がどれぐらいが至適なのか？とか、どの身体的能力を評価して、どの種目のスペシャリストにすべきなのか？等の問題が存在する。

このような状況下では、国家的・統一的スポーツタレントの発掘ということや、さらにそれによって選抜された子供達を特定のスポーツ種目の競技力向上のためのプログラムに追いつ込むということは、国民の中に培かれた、教育観からすれば、到底国民に、認知されるものではなかった^{註7)}。

(2) ドイツにおけるスポーツタレントの発掘・育成のシステム

今は亡き、ドイツ民主共和国 (D.D.R.) は、スポーツタレントを持つ子供達に対する発掘・育成の徹底したプログラムを保持していた国として有名であった。もとより、社会主義国であったので、そうしたシステムに対する思想的認知・合意といったものは、その社会の中では存在していたかも知れないが、その是非を問うことは、莫大な紙面を要するので、次の課題に譲ることとして、ドイツ民主共和国で実際に行なわれていた、スポーツタレントを持った子供らの発掘・育成に関するプログラムの『事実』のみをここに示してみたい。

子供らのスポーツタレントの発掘・育成の手続きは次のように実施される。(詳細は表1にて)

- (1) 一般的な第一選考段階
- (2) 第二選考段階の準備 (一般的体力と特定スポーツ種目の力量の評価)
- (3) 第三選考段階 (より専門的スポーツ種目)
- (4) 医学的検査 (より集中的トレーニングに対する耐性の調査)
- (5) 試行的トレーニング (6ヵ月間実施、トレーニングの強化に対する興味、スポーツ技術や知識の増加、個人的・社会的資質の発展等の調査)
- (6) トップクラス選手に向けての選抜 (ナショナルチームのメンバーに選抜された後、トレーニングセンターの主事と父兄の話し合いが行なわれる)

この選考の第一段階は通常9才～10才の時に、学校体育の授業の中で実施される。この第一段階選考に次のようなデータが考慮される。①個人の履歴 ②身長 ③体重 ④60mダッシュ (の記録) ⑤巾跳 ⑥三連続片足跳 ⑦持久走 ⑧ボール投 ⑨砲丸投 ⑩腕立て伏せ ⑪敏捷性競走 ⑫体育の成績 ⑬体操の成績 ⑭ボールゲームの成績 ⑮課外スポーツ

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

能力 ⑯スポーツ競技に対する興味

これらのデータはドイツ民主共和国のスポーツ連盟本部に集積され、さらに①体型発育予測 ②最終的身長の予測 ③同一年令と比較した身長・体重の偏差なども重ねあわせて、最終的に評価をして、スポーツタレントを発掘してゆくのである^(註9)。

しかし、子供らの生物的発育年令と暦の上での発育年齢の差異はある時は30ヵ月以上の差があり、実際の指導プログラムを設定する時には非常な困難をもたらすことが多かった。さらにドイツ民主共和国では、生物的発育年齢を、タレント発掘の指標にしているが、運動生理学的知見では、とくに女子に対しては、初潮年令を指標にすべきだとされている。このような問題の上にさらに、子供らの育ってきた社会環境や遺伝的要素、さらにその年令までにどれぐらい専門的トレーニングを積んできたのか等の考慮も併せて行う必要性があった。

このようにして第一選考段階、トレーニングを経るなかで、子供らの一般的運動能力の開発と、第二選考段階で行なわれるより専門的スポーツ競技の準備が組織化されるのである。さらに最終的なトップクラス選手として選考される時には、スポーツクラブの指導者、学校の教師、両親の三者において討議されて決定されてゆく。その際には、よりハードなトレーニングに適応出来るのだろうかという医師の検査も必要とされている。このように選考された選手が表1に示された試行的トレーニング（6ヵ月）へと入ってゆくのである^(註9)。

ドイツ民主共和国における高度なスポーツトレーニングに参入してゆく子供達を選抜するための重要な要素について

表1

一般的選考過程

第 一 選 考 段 階	第 二 選 考 段 階	試 行 的 ト レ イ ニ ン グ
子供に関する一般的データ分析、観察、面接	運動能力テスト	施行期間における短期間の数種類の練習
(a) 一般的健康状態 (b) 学校の成績 (c) 社会的状況とスポーツへの興味 (d) 当該スポーツからみた体型 (e) 一般的運動能力 (体育の授業時における)	(a) より綿密な当該スポーツに必要な運動能力テスト (b) より正確なスポーツ競技側の要求	パフォーマンスと行動 (短時間の練習における) 一般的及び当該スポーツの運動適応能力のテスト 人格全体の評価

さらに、子供達のタレント発掘の根拠の難しさと相俟って、さらにやっかいなことは、多くのスポーツ競技団体は11才～12才以前の子供達を必要としたことであり、かつまた、これら優秀なスポーツタレントを持った子供達を、各競技団体で奪い合うかたちになってしまうことであった。

このようなスポーツタレントを持った子供達の発掘・育成を成功させるために、ドイツ民主共和国においては、1年間に20万人以上の子供達をテストした。第一段階の選考において約5000人がパスし、さらに2500人が試行的トレーニングに入ってゆく状況であった。最終的には2000人が幼年・少年スポーツ学校（18～20種ほどのスポーツ競技）へと進学していった。この中から20人程の若者が、後のトップスターの階段を駆け上っていったのであった。

次に、統一以前にはドイツ連邦共和国と呼ばれた、旧西ドイツにおける、スポーツタレントを持った子供達の発掘・育成の状況を陸上競技連盟の方策を中心に検討してみたい。（ボッフム市とドルトムント市の例を中心に）スポーツタレントを持つ子供達らの発掘方法をより科学的にしようと努力しているボッフム市においては次のようなテストを実施している^(註11)。

- (1) 運動能力の基本テスト（詳細は表2参照）
- (2) 試合におけるパフォーマンス
- (3) 教師やコーチからの推奨

このテストは通常の学校の生徒（10～11才）を対象に実施され、テスト結果の良かった子供は、引続き、学校で2～3年トレーニングを受ける。その後、正規の学校で授業を受けた後、帰宅前に、地域のスポーツクラブと綿密に連絡を取って作り上げたスポーツセンターに、行くことになる。さらに上質な能力を持った子供達は、ボッフム市に設置されている、スポーツスペシャリストのための学校の形式を持つ、より高度な内容のより高度なスポーツクラブに行くようになる。これらの子供らは、通常、ジムナジウムに進学することになる。しかしスポーツタレントを持った子供達の寄宿舎付学校は、あまり成功しなかったという経験を持っている、ドイツ連邦共和国では、普通の学校で、家族的、文化的環境の中で、これらの子供らを育成したほうが効率が良いということに気づき始めた。

そうした中で、スポーツタレントの発掘・育成に関する方法の改良に取りかかっていった。その第一は、通常の子供らと、選ばれた、スポーツタレントの優秀な子供らのグループを選定し、彼らの諸能力を年令縦断的・継続的に検討することであった。この調査の項目は次のようなものであった。①一連のテストの妥当性・正確性 ②年令と性別による運動能力の相互関連 ③システムティックなトレーニングによって運動能力が発達するという結果の追求

これらの縦断的・継続的調査（男子1339、女子1246 計2585のデーターが集められた。）の結果、次のような事柄が明らかになった。

- ①継続的トレーニングが常に、彼らの持つ、優秀な資質を成長させるとは限らない。②身

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

体の形態（身長・体重）の発達、11.5才～12.5才にかけて急速に発達すること ③運動能力は一般的に言えば、一定期間のトレーニングによって向上する。等であった^(註12)。

これらの縦断的・継続的調査の結果は、新しいスポーツタレントの発掘方法を設定するのに有効であった。さらにこの調査を、ドイツ連邦スポーツ科学研究所は、半年に1回ずつ、9才～16才の子供らを対象に行っていくのである。

表2

	運動能力	テスト種目	試技回数	測定単位
基本テスト	1. Speed	(a) 30 m dash, standing start	1	1/100 sec.
		(b) 30 m dash, flying start (10 m)	1	1/100 sec.
	2. Power (lower limbs)	(a) 5 spring jumps* ¹	2	cms
		(b) standing broad jump	2	cms
		(c) as in (b) but after depth jump* ²	2	cms
	3. Power (upper limbs)	(a) ball throw (400 g)	2	metres
		(b) Shot put (3 kg)	2	metres
	4. Endurance	800 m run	1	1/10 sec.
	5. Co-ordination	Obstacle run	1	1/10 sec.
				単 位
人体測定	Body Height			cm
	Body Weight			kg
	Arm Span (between finger tips)			cm
	Length of legs			cm

*¹ performed in five consecutive jumps with alternating left and right foot, and landing with feet together

*² i.e. jumping down from a specified height and performing the broad jump straight from the landing

Basic Test of Selected Motor Abilities and Supplementary Anthropometrical Measures (Bochum/FRG) (Source: Stork (1985))

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

(3) その他の諸外国におけるスポーツタレントの発掘・育成のシステム

スポーツタレントを持った子供らの発掘・育成という課題は、経済的に恵まれた、スポーツ文化を充分に享受出来る状況の中でこそ可能なはずであるが、秀れたスポーツパフォーマンスが国民を鼓舞したり、国威を発揚したりする側面があったりするので、経済的に充分な余裕のない、発展途上国でも関心を持たざるを得なくなっている。巨大な経済的負債を負い、乳幼児が1000人に100人死亡するといったブラジルにおいてさえも、スポーツタレントの発掘・育成に関心を注いでいる。1974年にブラジル体育大学によって設立されたプロジェクトは次の3点の背景を保持しながら研究が開発された。

①あまり精密ではない器具を使用しなければならない。②簡素な技術的方法を用いなければならない。③実践的でより効果的な測定をしなければならない。このような状況の中で身体能力の要因について、15,000人を対象にした調査に着手した。その内訳は12000人が一般の人々、3000人が国際級のスポーツ選手であった。この調査の結果レベル1からレベル6まで分類し、レベル1は学校の児童生徒で7才～18才までで、週2～3回体育授業に参加する程度。レベル4は地域的選手として競技会に参加する。レベル5は、国内の選手権を競う層で、レベル6は、国際試合にブラジルを代表して参加する選手という具合に選別した。(検査項目は表3)

またこのテストとは別に、バレーボールの選手とバスケットボールの選手を抽出し、彼らの身体運動能力と一般の子供達の比較を示し、この中から、あまりに早すぎる、専門種目への没入は、一流選手として成功するのは困難であるといデータを示している^(註13)。

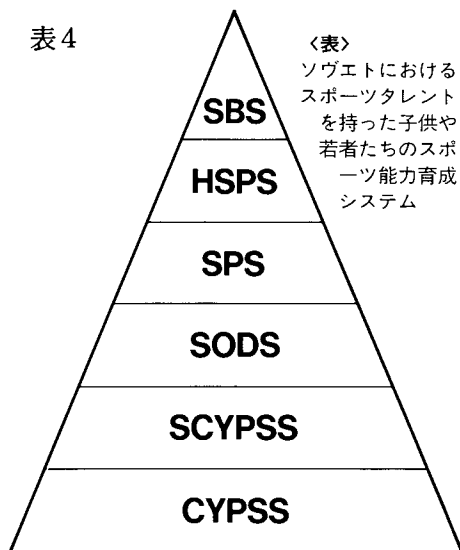
R.J.フィッシャーは、その著、“The Search for Sport Excellence”の中において、発展途上国におけるスポーツタレントの発掘・育成という課題の達成は困難を極めていると指摘し、その抜本的施策としては「学校教育」制度の確立とその中における「学校体育」の充実こそが、スポーツタレントの発掘・育成の王道であろうと主張する。

次に、ドイツ民主共和国とならんで、社会主義国として「スポーツ大国」を確立した、旧ソヴェト連邦において、このタレントを持った子供達の発掘・育成は如何なるシステムが存在していたのであろうか。

1917年に社会主義国家が設立されて以来、ソヴェトにおいては、独自の政治・経済体制を確立していった。教育・体育についても社会主義体制にふさわしい政策が展開されていった。特に「体育」は、人間の『身体』が労働と防衛(軍事力としての身体)にとって欠くことの出来ないものであることに着目し、教育全体の中でも非常に重い位置を占めるに至った。1937年には、国民全体が自らの「体力」の状況が把握できるように、国民全体が「G.T.O.」という体力測定制度に参加する政策が決定された。このG.T.O.は地域社会・工場・スポーツクラブ、学校など至るところで検査を受けることが出来た。このG.T.O.の制度が、今日のソヴェトにおける、スポーツタレント発掘・育成の基礎になっている。このG.T.O.のプログラムは5つの段階からなっており、年令別に構成され、それぞれ、走、跳、投、射撃、スキー、体操

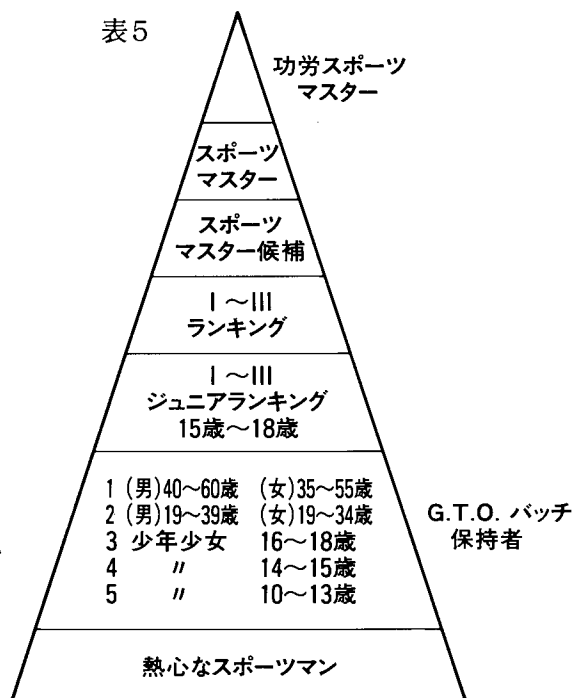
といった種目のテストを受けることになっている。5つの段階とは、①10才～13才（男）（女）②14才～15才（男）（女）③16才～18才（男）（女）④19才～34才（女）19才～39才（男）⑤35才～55才（女）40才～60才（男）より成っており、これらの段階で秀いでた記録を残したものにはG.T.O.バッヂが与えられ顕彰される^(註14)。子供達はこの第一段階ないしは第二段階で、そのスポーツタレントを発掘され、その能力をより一層向上させるために、新たなコースに入っていく。まず最初にCYPSS（Children's and Young People's Sport School）に参加することになる。この学校は、通常の学校制度の外に位置し、5000をこすCYPSSがソヴエト全土に設けられ175万人の子供らが通っている。例えば、ベラルーシ共和国においては、この共和国を6つの地域に分け、それぞれの地域に、35のCYPSSを設置し、それぞれに約50人ほどのコーチを配属してある。このCYPSSに参加するのは11才ごろからであるが、競技年齢が若年化している水泳では7～8才かそれ以前からの入校を認めている。体操競技に至っては4～6才から参加し、サッカーでも6～7才からサッカー幼稚園を開いている。これらの学校は、通常の学校終了後、週3回、約2時間ぐらいの授業を受けるのである^(註15)。このシステムは、表4のように最終的には、寄宿舍付の体育大学へと連なり、表5の功労スポーツマスターを目指すピラミットが形成されていくのである。

表4



SBS—スポーツ寄宿舍学校
HSPS—上級スポーツ専門学校
SPS—スポーツ専門学校
SODS—スポーツ適応者むけのスポーツスクール
SCYPSS—上級子供と若者のスポーツスクール
CYPSS—子供と若者のスポーツスクール

表5



1 (男)40～60歳 (女)35～55歳
 2 (男)19～39歳 (女)19～34歳
 3 少年少女 16～18歳
 4 " 14～15歳
 5 " 10～13歳

2 スポーツタレントの発掘・育成にかかわる諸問題——諸外国の制度を省りみて——

(1) スポーツタレントの評価・選抜の方法

さまざまなテストを用いて、子供らの持つスポーツタレントを評価し、早い時期に選抜し、そのタレントを育成するという指向は、近年、どの国にも見うけられる傾向である。

しかし、それらのテストに表われたデーターをどのように読み、評価をし、特別なスポーツタレント育成コースに導入するののかという問題は、たいへん複雑で難しい課題である。その問題について、ソヴェトのザチオルスキーは「スポーツタレントの発掘のために必要とされる中心的課題は、身体活動を構成している要素に関する問題についての知見であり、そのためには、その身体活動に用いる技術と運動の性格についての両方についての一貫した、予備的分析が必要とされる」とし、単一のファクターだけでは、子供らの持つ能力を見抜くのは困難であると指摘している。

また、身体の発育についても生物的年令と暦年令の差異、いい変えれば早熟型や晩成型の認知についても重要である。さらには女子には初潮の時期などの考慮も必要となってくる。さらに、全身持久力の能力を評価するのに絶好の指標とされている $VO_2\max$ にしても、ダニエルズらの報告では、「長距離走の能力が向上しても、 $VO_2\max$ は不変であった」と指摘している。このように $VO_2\max$ の測定値が必ずしも全身持久力を示す目安とはならない。このように、どの測定法でもって、どの能力を評価するのか？という問題や、その能力がスポーツ能力とどのような関連性があるのか？などについても、さまざまな見解が存在する。故に、スポーツタレントを発掘する作業一つをとってみても、より一層の研究の進展と年令縦断的研究の成果が期待されるところである。

(2) スポーツタレント育成に関する社会的・教育的諸問題

スポーツタレントを持った子供達を発見し、その能力を開発するために、色々なコースが開かれ、各国独自のシステムによって、彼らの能力が育成されようとしている。それらの子供らがどのように人間として成長するのかさらに、その上、スポーツタレントを如何に伸展させてゆくのかといった、人間の全人的発育発達とスポーツ能力の発達を統一的に考え志向することが出来るのは、まずもって、彼らの「親」と「家庭」である。カナダのブルームらの報告にもあるように、子供らの才能を開花させるのに、両親と家庭という背景が最も重用であったし、さらに子供の成長を展望しながら、子供のスポーツ活動に制御・援助を与えられるのもこの両親と家庭であった。

ヘメリーの報告でも、トップクラスのスポーツ成績を示した選手の98%は、自分自身の成功を省りみて、両親の終始一貫した自分への態度のおかげであると感じているし、自分自身の動機づけは、家庭生活からであったと回顧している。そして多くの両親は、そんなに若い時から、彼らを過度な競技力向上の世界へ押し込まなかったことが、成功の原因だと答えて

いる^(註16)。さらにカールソンとエングストンの報告では、スウェーデンにおけるテニスプレイヤーの成功の原因を追求し、報告している。カールソンらの報告では、その成功の最大原因に、彼らの育てられてきた環境であったと報告している。さらにテニスプレイヤーとして高度なレベルに達したほとんどのプレイヤーらは、自分自身が、とても環境が良い小さなクラブに所属し、そんなに高度な資格はとってはいないが、大変熱心で、彼自身を援助してくれる、親しみやすいコーチのもとで育てられたと回想している^(註17)。このように、スポーツタレントを持った子供らが順調に育っていく過程において、子供の将来をしっかりと見据て、彼らの発育発達段階を視野に入れ、その彼らのスポーツタレントを伸してゆくということの、「意味」と「意義」を確められるのは、「親」と「家庭」である。その家庭や両親の、さらに指導者の暖い庇護と指導の中でこそ、子供らは円満な発育発達が遂げられるのであろう。

スポーツタレントを育成するために、子供たちを特別な育成システムの中へ追い込んでゆくということは、その成果のうらには危険が一杯存在していることも充分認識せねばならない。オーリックは「スポーツ優秀者の追跡」と言う論文の中で「スポーツにおいて優秀な成績を納めようとするならば、その子供らの『人生』の安寧を破壊しなければならない^(註18)。」と記している。またR.J.フィッシャーは、「スポーツタレントを持って、その達成のために没入してゆく子供や若者達の多くは、往々にしてスポーツへの思い入れが激しくなり過ぎる。そして最も大切なことである、自分の人生を展望をし、自分自身のスポーツ生活とどのようにバランスをとるのか?ということをおぼえてしまっている者が多い^(註19)。」と嘆いている。さらにフィッシャーは「スポーツタレントを伸展させようとしている子供らに対して、日常のトレーニングをしているセンターに接近したところに、特別の補習学校を設置してやるか、さもなくば通常の学校の中でトレーニングをすることの出来る「時間」を設定してやるような、気のきいたカリキュラムの再編をしてやるべきである。そのことによって、それらの子供達にとって充分な教育を受けさせてやるべきである。トップクラスのスポーツに参入してゆくことによって、彼らの人生のパースペクティブが破壊されるようなことがあってはならない^(註20)。」と主張している。

トップクラスのスポーツマン達が、スポーツに幻滅したり、スポーツ技術の進歩が止ったり、怪我をしたり、社会的プレッシャーに負けてしまったりというようなさまざまな理由によって、引退したり、ドロップアウトしたり、燃えつきてしまったりしてしまった者にとっては、まさに「ヒーローからゼロ」になってしまう訳である。このような子供や若者達にとって、人生が破滅してしまうことになったのでは、何のためにスポーツをしてきたのか?ということになってしまう。スポーツ以外の文化を会得してそれを楽しむことが出来たり、人生への的確な見通しを持つことが出来るようになるためにも、人間として十全な『教育』が、彼らトップを目指すスポーツマンにも与えられるべきである。

(寺島善一)

II 日本におけるスポーツタレントの発掘・育成の潮流

本題に入る前に、日本におけるスポーツの発達の概略を述べておく必要がある。

日本における近代スポーツの基点は西欧スポーツが紹介された明治初期に遡ると言うことができる。約半世紀にわたる明治代は、日本の近代スポーツ体制を基本的に確立した点で、たいせつな時代であった。すなわち、西欧のスポーツが紹介され^(註21) 既興的に楽しまれた明治初代から端を発し、明治10年代に学生たちの同好クラブができ、「運動会」(Athletic meeting)が開かれ、明治20年代になると運動クラブが統合され、中学校での運動クラブなどでは対外試合も活発化しスポーツが競技化の性格を強める素因となった。陸上競技と競漕と野球は初期の3大競技と言われ、特に、陸上競技などは明治30年代に^(註22)、それまでの娯乐的・教育的な運動会から脱皮して、競技会へと専門分化しはじめた。明治40年前後日本のスポーツ界は急激に競技化し、明治44年の大日本体育協会の創立と明治45年に東洋から初参加の第5回オリンピック(ストックホルム)へとつながるのである。大正前半期では、体育協会を中心に、種目別選手権競技が举行され、技術的な向上がはかられていく中で、代表的な競技は陸上競技と水上競技であった。また、野球やフットボールなどの、球技関係は、新聞社主催による「全日本」とか「全国」とか称される競技会を通じて促進されていく。大正期後半期には国内スポーツ体制も整備され、種目別競技団体が結成され、種目別の世界選手権といった国際競技会への道が開かれていった。この時代において、陸上と水泳に関する若干の種目、また、テニスなどの球技も国際的な技術水準に達した時期でもあった。とくに昭和11年(1936年)第9回オリンピック大会(ベルリン)の前後数年間が、戦前の日本のスポーツ界が質量とも充実した黄金期であった。日本人の手によって水泳や陸上などの世界記録もつぎつぎに更新され、また、ボールゲームの技術的水準も、一般的にいて、この時期にいちじるしく向上した。そして、第2次世界大戦間の停滞期を経て、戦後の新時代へとつながった。この間、技術や組織や規制は、体育協会傘下の各加盟団体が中心となり、旧制の高等学校や大学の運動部が主体となり、各競技は益々高次化していった。戦後の日本のスポーツ界は、まず、戦前なみの技術や記録をとり戻し、戦前には予測もしなかった競技種目において、世界をリードするようになった。かつて、世界的名声を獲得した日本の二大競技(陸上と水泳)に変わり、卓球、バドミントン、体操、レスリング、重量挙げやバレーボールなどの種目は戦後急速にスポーツ化をとげ、国際的水準に達し、世界の選手権をめぐるチャンピオン・スポーツとして、技術は高度化し、競技ははげしいものになっていった。

その背景には国内においては、1946年から実施された国民体育大会であったと考えられる^(註23)。戦後の荒廃によって健全娯楽を失った国民、とくに青少年にスポーツの喜びを与えることを動機として、スポーツの普及および施設の充実に大きな役割を果たした。国民体育大会は各都道府県持ち回りで行なわれるようになり、全国的な規模のスポーツ大会となった。

他方、国際的なスポーツの進出は1952年の第15回ヘルシンキオリンピックを契期とし、1964

年の第18回東京オリンピックにおいてその勢いは頂点に達し、以後、日本のスポーツ界はチャンピオンスポーツに傾斜していくのである。

以上の発展史の潮流を前提として、以下、具体的に日本において最も早くから実施されて来た陸上競技と戦後、いち早く国際的水準に達し、世界のトップに君臨した体操競技の二種目について、表題の問題の考察を加えたい。

1 日本陸上競技連盟におけるスポーツタレントの発掘・育成の方法とシステム

(1) 選手養成の背景

日本における選手養成の供給源の母体は学校である。戦後、1949年に学校制度が変わり、旧制から新制へと切り変り、カリキュラムもアメリカの影響を受け、新たな種目が教材として、学校体育の中に取り入れられるようになって来た。陸上競技の一部種目も中学校から、初歩的な指導がなされる様になって来たが、実質的な活動は課外におけるクラブ活動がその役割を果たしてきた。しかも、専用のグラウンドはなく狭い運動場は他の競技と共有するため必然的にグラウンドの片隅で細々と練習することを余儀なくされることから、地味で苦しい練習が強いられるために、特殊な例外はあるが、他の競技種目に比較して、選手層は薄く、国際的水準の選手養成は芳しくない。その背景には我が国におけるスポーツ選手の育成の組織は学校の課外活動における運動クラブにのみに頼ってきた傾向があった。学校制度という枠の中でのトレーニングには限界があり、将来を見据えた視野での一貫性を持った指導ができず、場当たり的であり、競技力向上をめざす現場の指導者より、数多くの苦情が出されることが多かった。優秀な資質ある者も、ときにはトレーニング方法の誤解によるオーバーワークから、精神的に燃えつきるという事態を露呈することも間々あった。

(2) 日本陸上競技連盟の対応

日本体育協会・スポーツ科学委員会の陸上班では、昭和63年より、同委員会のプロジェクトとして、「競技力向上に関するスポーツカリキュラム開発研究^(註23)」で、以下に挙げる研究をまとめている。

(イ) 「競技者の生育歴・競技歴に関する調査研究」^(註24)

(ロ) 「陸上競技のコーチングに関する研究」^(註24)

(ハ) 「陸上競技の指導カリキュラムの基本構想」^(註25)

(ニ) 「陸上競技の種目別指導カリキュラム」^(註23)

以下、上記の調査研究の要約をまとめておく必要がある。

(イ) わが国のジュニアおよびシニアのトップレベルの競技者のトレーニング過程を調査し、

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

ジュニア競技者のための指導カリキュラムにおける問題点を引き出した。

- ① トップレベルの競技者の大多数は、子供の頃に屋外で活発な運動遊びを経験しており、また、中学では40%が陸上競技以外のスポーツを経験していた。このことは本格的に陸上競技を始める前に幅広い運動経験が必要であること示唆している。
- ② 練習時間は中学から高校、大学へと増加傾向がみられるが、シニアよりジュニアの方が多い。
- ③ 陸上開始時期は男女とも中学1年生からが多かった^{*7}。また、専門種目の開始年令は^{*6}、シニアの男女が16.5～16.9才、ジュニア選手は男女ともに13.6才～15.0才までに専門種目を開始していた。同様に、専門的体力トレーニングの開始もジュニア選手の方がはやく、早期専門化傾向が明瞭であった。
- ④ シニア選手のピークパフォーマンスに達した年令は、男子では短距離23.7才、中長距離27.8才、跳躍23.3才、投擲26.5才、女子では、中長距離24.5才、跳躍21.0才、投擲19.0才、であった。いずれも、競技開始してから長い年月を要しており、男子では約10年以上であった。(日本体育協会スポーツ科学研究報告集、関岡ら 1990,) 以上、競技種目からみた陸上競技の練習・トレーニングの至適年令の道標となり得る綿密で貴重な資料である^{*6}。この資料を基に1991年に具体的な陸上競技の指導カリキュラム基本構想と種目別指導カリキュラムが発表された^(註23)。

表6 陸上競技の練習・トレーニングの至適年齢についての比較 ^{註24}

項 目	指 導 者	短 距 離	中 ・ 長	跳 躍	投 て き	混 成
練 習 開 始 年 齢	日 本	12.0	13.4	12.5	13.2	12.9
	外 国	12.7	14.4	13.1	14.1	14.1
種 目 決 定 年 齢	日 本	15.3	16.2	15.6	16.0	16.7
	外 国	16.1	17.4	15.9	16.4	17.0
専門的技術練習開始年齢	日 本	14.8	16.6	15.2	15.7	16.3
	外 国	16.2	17.8	16.7	17.3	17.1
専門的体力トレーニング開始年齢	日 本	16.6	17.7	17.0	17.3	17.5
	外 国	16.6	17.0	17.0	17.3	17.0
最高成績到達年齢	日 本	23.9	27.1	24.8	26.7	26.4
	外 国	23.3	26.3	23.7	26.3	25.7

表7 各種目郡別にみた各項目に対する指導者の回答年齢の平均 注24

項 目	指導者区分	短 距 離	中 ・ 長	跳 躍	投 て き	混 成
練習開始年齢	高 校	11.7	13.1	12.4	13.3	12.9
	大 学	12.5	13.9	12.6	12.9	12.6
	社 会 人	15.0	13.5	15.0	15.0	15.0
	全 体	12.0	13.4	12.5	13.2	12.9
専門種目決定年齢	高 校	15.1	15.9	15.4	15.7	16.5
	大 学	15.6	17.0	16.2	16.8	17.4
	社 会 人	15.0	16.5	15.0	15.0	15.0
	全 体	15.3	16.2	15.6	16.0	16.7
専門技術練習開始年齢	高 校	14.6	16.3	15.0	15.4	16.1
	大 学	15.1	17.3	15.8	16.5	16.8
	社 会 人	15.0	14.5	15.0	15.0	15.0
	全 体	14.8	16.6	15.2	15.7	16.3
専門的体力トレーニング開始年齢	高 校	16.5	17.3	16.9	17.0	17.5
	大 学	16.8	18.2	17.2	17.9	17.5
	社 会 人	—	19.5	—	—	—
	全 体	16.6	17.7	17.0	17.3	17.5
最高成績到達年齢	高 校	23.9	27.0	24.5	26.4	25.9
	大 学	24.0	27.6	25.5	27.5	27.6
	社 会 人	—	25.5	—	—	—
	全 体	23.9	27.1	24.8	26.7	26.4

(3) 選手の発掘と育成

陸上競技の歴史的特性としては、人間の生活・生存のための生きる技術として、他の運動に類をみない、最も古い歴史をもった運動として位置づけることができる。

また、文芸復興以来、近代スポーツは一般庶民の中に深く浸透していったが、陸上競技は、世界に共通の運動としてとりあげられ発展を示している。また、陸上競技は、人間の生活・生存活動のために必要な、最も基礎的な運動を、最も単純な型式において競技化したもので、流行に左右されない素朴な運動として捉えることができる。

反面、この単純化されたスポーツ種目に対する興味性が問題点として内蔵している種目とすることができる。このように考えると「陸上競技は、人間の基礎的運動能力を競い合うための最も単純化された運動」であるとまとめることができよう。さらに、陸上競技は、人間の基礎的運動能力そのものの中で、体力を最高度に、しかも、それらを効果的に身につけることができる運動として位置づけられる。

このような観点に立って陸上競技を考えると、陸上競技の特性を広く理解し、教育の中での体育の教材としての陸上競技の価値が改めて認められよう。このことは単に「文化遺産」としての青少年のために還元するところの身体教育の場に、陸上競技が位置するものではな

いことを示している。

また、これらの「文化遺産」は教育という立場からは、近代科学の発展とともに成立し、形成されていくものであり、決してギリシャ時代の変容ではなく、陸上競技の特性からあらたにしなければならない問題点となろう。このように考えてくると、陸上競技の一般的広義の価値論から、身体教育の教材として、青少年の発育発達の可能性が保証され得るような技能・知識の体系化という具体的な展開により、教材としての真の価値と教材の評価も生まれてきたことも理解できる。

かくのごとく、陸上競技を考える立場には、二つの立場がある。一つは、学校体育の中における陸上競技の立場であり、他は、競技スポーツとしての陸上競技の立場である。日本における陸上競技の指導者の多くは学校の教員であった。前にも述べた如く、日本における選手の出発点の母体は学校であった様に、この両者の立場は非常にあいまいで、いきおい、その指導においても、結びつきにおいても、必ずしもその区別が明らかであったとはいえない。

現在、陸上競技選手の養成は、大学のクラブ活動の一環としての学校教育の枠の中であったり、女子選手の多くは、社会人のある企業での育成がその源となっている。

特に、長距離選手の養成は1970年代末からのジョギングブームを契機として、一部企業のスポンサーによる宣伝活動になっていることは衆知のことである。大衆のスポーツ活動としての陸上競技と、企業の宣伝活動としてのそれが混然として、年々その規模は増大してきている。

かようにして、陸上競技を重視する人の中には、陸上競技はオリンピックの中心的種目であり、チャンピオンスポーツ種目を守ることの必要性を強調する立場と、一方、その技術内容やトレーニング法を利用して、人間本来の基本的能力である走・跳・投が構成要素であるため、すべてのスポーツに先んずるものであるという立場から、基礎体力の養成や、レクリエーション的観点から、生涯学習の一環としての保健的側面にその価値を意味づける立場が併立しているのが現状である。

ここに至って、底迷続ける我が国のチャンピオンスポーツとしての陸上競技の国際的競技力の水準の低下に、歯止めをかけるための施策の一つとして、遅ればせながら、日本陸上競技連盟の方針が出されたものが前述の②の日本陸上競技連盟の対応策である。戦後、四十数年を経て、初めて指導の方針と方法が具体的に示されたということができる。

今後、これらの資料や調査を基にし、いかなるシステムで、どのようにしてこれらの施策を実現させていくかが最も重要な課題となろう。

したがって、日本陸上競技連盟のスポーツタレントの発掘と育成は現時点においてその途についた所であり、具体的には、未だ何もその方策を持ち得なかったということができよう。

2 日本体操連盟におけるスポーツタレントの発掘・育成の方法とシステム

(1) 日本における体操競技の国際舞台への復帰とその背景

1936年のベルリン・オリンピック大会から戦後までの9年間は国際舞台から隔絶され、技術停滞あるいは技術的に後退した時期であった。ヨーロッパにおいても、世界大戦の終了とともに、せきを切ったように技術は復活したが、それらはベルリン大会ころの技術の復活であった。ヨーロッパ体操界の主流から遮断された我が国の体操の技術はベルリン大会に出場したコーチ・選手の技術上の印象やフィルムを頼りに暗中模索の努力を求められた。このことが、きわめて日本的な技のさばきを成熟させたといわれている^(註25)。つまり、それまでにあった技術や技をじっくりととりくまざるを得ない状況と、さらに、日本人の技芸に対する追求心が加わって、日本選手独特の技のさばきがはぐくまれていった。この間に、日本特有の伝統的な技術観が定着していったと考えられる。つまり難かしい技であっても、困難さを全く内に秘めて、きわめて、さりげなく余裕をもってさばくことを技の極致とする技術観^(註25)である。

1950年に国際体操連盟に復帰が認められ、戦後はじめて参加した1952年ヘルシンキオリンピック大会で団体5位というめざましい活躍となって具現したのである。

日本の体操競技が国際舞台に復帰した当時の国際的な技術の基準は、1949年の新採点規則によってその方向が示された。それまでの採点規則は「自由演技においては流れるように美しく組合わせられ、実施は完全な優美さと安定性をもたなければならない」といったようなきわめて牧歌的なものであった。20世紀に入って、体操の技術の研究も進み、技の名称と概念がドイツを中心とした学者ら（A.Kunath, G.Borrmann）により、統一され、科学研究により技の構造や技術が解明される胎動期であった。

事実、1950年にスイスのバーゼルで行なわれた、第12回世界選手権大会以前の競技会では、競技種目の中に現在の体操競技の種目のほかに、100m走や、棒高跳、走高跳の陸上競技種目が残っていたといわれている^(註25)。このように陸上競技の種目が入っていたのは、「総合的な、合理的な運動を通じ、青少年の心身の健全な発達をはかる」というヤーン（F.L.Jahn）以来の教育的意図があったと考えられる。このバーゼル大会を最後に体操競技は現在実施されている体操競技として専門種目化していった。

一方、国内では1946年の第1回国民体育大会を始めとして、全日本選手権大会、全日本学生選手権（1946年）、全日本高等学校選手権大会を主体とした全国規模の競技会により、国際的に隔絶され、外国からの情報のない中で、日本固有の技術が定着し、成熟していった。これらの活動の基盤は戦前から、体操愛好者を中心とした教育系大学のクラブにおいて育ぐまれ、その先駆的継承者達により全国的に、伝達され、牧歌的な競技会を通じ、互いに技術を競い合った。個性的な職人的先達者によって育てられたその教え子達が、全国に散り、弟子を育てるといった徒弟制度のような組織であった。まさに、家内手工業的な選手養成法で

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

あったといえよう。そして、1950年5月に戦後初の国際競技会が開催され、(日米対抗体操競会)、初めてみる米国選手の華麗な技術に若い体操愛好者は大いに触発された。これを契機として、同年7月に国際体操連盟^(註27) (F.I.G.) に復帰することがバーゼルのFIG総会において承認されたのである。

このことは、日本の体操界にとって、幸いにも、国際体操界の競技化傾向とその近代化の方向性に大した差がなかったことと、同時に国際的にも近代化の時期^(註28) であり、それは1952年第15回オリンピックヘルシンキ大会において、日本が戦後初参加した、「5人の選手団^(註29)」で、上位入賞を果たしたことは伝統ある西欧各国の強豪チームに対等な国際的な技術的水準を有するチームとして実証されたことであった。

(2) 日本の体操競技の国際競技会参加と選手育成の方法

1952年に戦後、初めてオリンピックに参加し、国際舞台への基を切り開いたことは、さきに触れたが、この大会はまた別の意味で体操競技にとって大きな国際的な転機となった。それは体操発祥国のドイツの復帰であり、それに加えて、「鉄のカーテン」を開いて初参加したソ連^(註30) の台頭であった。このことに関して、当時、選手として参加し、また、戦後の日本の体操競技の胎動期から外国技術の同化期を科学的調査や研究の基礎を築き、技術の発展の先駆者である金子はその時の感動を彼の著書^(註31) のまえがきで、つぎの様に記している。「1952年、白夜のヘルシンキで開かれた第15回オリンピック大会において、私ははじめて世界の体操技術に接して、目の眩むおもいだった。そこには、ベルリン・オリンピックチャンピオンのドイツのシュワルツマンの鉄棒における大開脚とび越し下り、フィンランドの老雄サボライネンの磨き上げられた鞍馬の交差、スイスのシュタルダー選手など一世紀有余の伝統の上に築かれた重厚な、そして絢爛たる技があった。また、日本と同様に、戦後はじめて鉄のカーテンの彼方から参加したソ連の卓抜な技能があった。チュカリン、シャギニャン、ムラトフなどの名選手の織りなす演技には、西欧の伝統の殻を破った清新の気がみなぎっていた。私が伝統のあるドイツ、スイス、フィンランドのいぶし銀のようなしぶい技風と、科学研究に裏付けられて人間の技能の極限に挑戦していくソ連の激しい技風を同時に、そしてはじめて目の辺りにすることができたのはまさに幸いであった…以下略」

この感動は同大会に参加した他の選手も同様であり、これらの選手達が中心になり、国際体操界のあたらしい技術を貪欲にそれらを吸収していく源動力になった。とくに日本では考えられなかった技についてはその習得に執念ともいえるはげしさを示し、短い期間で修得し、その結果、1954年の第13回世界選手権で男子団体2位というめざましい成果を挙げ、世界一流の仲間入りした。当時の選手達は全て体育専門系大学を母校としていた。この人達を中心に、同世代の同僚や体操愛好者達は各地の学校に散り、指導者として、青少年の育成に努め、優秀な体操の後継者を母校に送り込んだのである。すなわち、当時の日本体操界の最高水準の選手がみずから指導者的な立場で、技術水準を高めていったのである。彼らの開発した技は母校を通して、高校生や中学生へと転移するのには、そう時間はかからなかった

のである。いきおい、メダル候補の有望種目として、青少年に夢と希望を持たせ、施設や器具の乏しい、貧困な状態の中で、多くの体操愛好者はその熱を昇華させていった。この結果、日本の体操界は、一躍、メダル争奪のチャンピオンスポーツとして、好むと好まざるに拘らず、その渦の中に巻き込まれてしまったのである。

そして、この外国技術の同化期を経て、目標を打倒ソ連とし、ソ連の技術開発の原点を見据えて、それを陵駕すべく努力が始ったのである。1958年の第14回世界選手権大会（モスクワ）と1960年第17回オリンピック大会（ローマ）の日本チームのリーダーであった金子は1958年の大会中に、ソ連の体操研究陣の首脳であったウ克蘭教授（当時、モスクワ・スターリン体育大学）との個人的会談の機会を得て、「ソ連における科学的研究の現状とコーチとの協力問題、ザリアトカ（充電トレーニング）の方法やトレーニング計画論等について長時間にわたり討論した」と報告している^(註32)。この時金子は「ソ連の研究は自然科学一辺倒の研究から脱出して、横断科学への道を辿りつつある」^(註32)と感じ取り大いに刺激されたようだ。ちょうどこの1950年代後半はスポーツ科学が大きな躍進期で、ソ連を中心とした社会主義国では、国家的な強力な組織の下にすばらしい業績をあげていた。「選手やコーチはその強力な研究や調査に支えられて、着実な前進を続けている。一方、自由圏でも、西独、スイスなどの研究活動も地味ではあるが底力をもっている」と指摘し^(註33)、翌年1959年に体操競技の科学的研究の必要性を痛感し、自前で独自の研究に着手、その研究成果を基に作戦やトレーニング計画に新機軸を打ち出した。それらはソ連から王座を奪い取るのに大きく寄与したと指摘している^(註34)。このことが契機となり1961年に体操協会内に科学研究調査部が設置されることになる。1960年のローマオリンピック大会で、ソ連の牙城を切り崩し、優勝した日本はその王座を堅持するためには、どうしても新しい技、新しい技術の追求してゆかねばならないことはいうまでもなかった。これまでは外国選手の技を分析し、先進国の文献を調査研究することによって進んできたが、これからは、みずからのつくりだしていかなければならない立場に立たされたのである。すなわち、このことは独自の技術開発期に入ったことを意味している。技の理想像の確立や技術の開発が急務とされた訳である。特に、1964年は東京オリンピック大会をひかえて、王座を堅持することが、国民的期待感であった。“その技術開発はたんに場あたりの思いつきによるものではなく、1つの技に沈潜し、その中に糸口をつかむという日本の伝統的技術観に支えられて来た”と金子は述べ、科学的研究の必要性について言及している。ここに至って日本の技術開発は拍車がかけられ、以後、日本の技術は王座を堅持するため必然的に難度へと傾斜していった^(註36)。かくの如く、1960年代日本体操界は現場の実践に、連応してその基盤を整えられたのである。この日本独特の選手養成の基盤は、まさに体操ファミリーの手作りと関係者の熱意のみに支えられきたのである。

(3) 技術の高度化に伴う諸問題

1970年代に入り、技術の高度化に伴うトレーニング環境の整備が問題となった。それは、中学校や高等学校のクラブ活動中の事故で死亡したり、重度の後遺症を残す事故が多発して

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

社会的な問題となり、このことを看過できない状態が多発した。このことは、自己の能力や技の潜在的危険をかえりみず、段階的なトレーニングの積み重ねもなく難度の高い技へ挑戦することに起因していることは明白であった。

このこと予防措置として中学校や高校生に対する禁止技の設定や年令や能力に応じた競技方法や能力別課題の検討が予儀なくされた^(註37)。この間に、世界各国、とくに欧米や中国で、若年層からの専門的な選手養成システムが早くから確立し、指導者の養成、トレーニング環境の整備などが総合的に営まれていた。

日本の競技力の停滞、練習環境の立ち遅れ、選手養成システム、試合方式の改善は一朝一夕には出来るものではなく、組織の再編の問題や経済的、社会的問題にも関与する国家規模的な課題である。1984年のロスアンジェルスオリンピック大会は空前の商業政策に裏づけされた大会であったことは衆知の通りである。この大会を機に、スポーツが人間の文化的・教育的価値をその活動の前提にしていたことから、新しく、社会的、経済的側面の重要視されることとなり、スポーツ界は益々異質の要素を内包することとなってきた。

おわりに

最後に、日本に早くから輸入され、戦前に華々しい活躍で、注目を浴びた陸上競技が、戦後はその影をひそめ、1970年代後半からのジョギングブームにより、1980年代末以来、わずかにマラソンの分野で注目されている。人間の運動の原点である走跳投の分野は人間の持つ総合的な体力の競争であり、日本の陸上界はその指導を学校だけにまかせて来た。体操もまた学校教育の枠の中で、指導され同じように発展をみたが、幸いにも、日本体操界にとって、競技性といい、復期の時期といい、国際的時流に乗ったことが、20年間に渡る王座の地位を堅持出来た理由であった。一方、時代の流れはスポーツに対する若者のスポーツに対する考え方も変容した。底辺を支えるべき若者はスポーツに参加するよりも、観客として観て楽しむ傾向になり、競技人口も減少の傾向を示している。組織や規則が複雑になり、技術が高次化することは競技スポーツの常であるが、このように一般大衆とスポーツ文化がかけ離れたところにあることは、競技スポーツとは別の分野で今後の最も重要な課題となろう。地についた、トレーニング計画により、適切な指導者のもとで、施設や環境に恵まれた状態で、競技スポーツも大衆スポーツも共存して、スポーツができるような社会環境を整備することは、スポーツ関係者や体育関係者にとっての義務的役割であろう。特に、スポーツ文化を誰もが気軽に享受でき得るコミュニティ社会は社会的なニーズでもあろう。今後、これら施策の定着過程に着目して研究を進めたい。

(高岡 享)

注

- 注 1 J.A Kane, R.J.Fishr "Giftedness in Sport" The Sport Council, 1979, P28
- 注 2 Ibid P28
- 注 3 B.J.Rees, "The EFFECT of INTENSIVE TRAINING of YOUNG ATHLETES" The Sport Council, 1986 P8
- 注 4 Ibid P8
- 注 5 "White Papar on Sport and Recreation" 1975
- 注 6 J.A.Kane, R.J.Fisher, op cit P28
- 注 7 R.J.Fisher, "The Search for Sporting Excellence" ICSSPE, 1990, P11
- 注 8 Ibid P41
- 注 9 Ibid P43
- 注 10 Ibid P43
- 注 11 H.M.Stork, "Stratagies of talent scouting and ralent development based on model project in track and field athletics in the Fedenal Republic of Germany" 1985, ICSSPE International Workshop, West London Institute of Higher Education.
- 注 12 Ibid Paper presented ICSSPE Work shop
- 注 13 Ibid
- 注 14 J.Riordan, "Soviet Sport-Background to the Olympics" Basil Blackwell Publisher, 1980 P45~46
- 注 15 Ibid, P58~60
- 注 16 D.Hemery, "Sport Excellence, A Study of Sport's Highest Achievers", Willow Books, 1986
- 注 17 R.Carlson and L.M.Engstom, "An Analysis of the players' background and development', in the Grouing Child in Competitive Sport" BANC International Congress Proceedings, Leeds, 1988
- 注 18 T.Orlick, "In Pursuit of Excellence," Coaching Association of Canada, P272, 1980
- 注 19 R.J.Fisher, op cit, P35
- 注 20 Ibid P35~36
- 注 21 岸野雄三、「スポーツの技術史」P38~36、1972、大修館書店
- 注 22 猪飼道夫他編「スポーツ百科事典」P314
- 注 23 「日本体育協会スポーツ科学研究報告集」 Vol.2 1991年度 P3
- 注 24 「日本体育協会スポーツ科学研究報告集」 Vol.2 1990 P9
- 注 25 岸野雄三・多和健夫編「スポーツの技術史・序説第二章（金子明友）P65」
金子明友「体操競技のコーチング」1969
- 注 26 小野泰男 編書 「体操日本栄光の物語」 日本体操協会 1972 P78~79
- 注 27 注 25 前掲論文 P68
- 注 28 注 25 前掲論文 P73

スポーツタレントの発掘とその育成法の国際比較研究

- 注29 注25 前掲論文 P70
 注30 注25 前掲論文 P71
 注31 金子明友著 「体操競技のコーチング」
 注32 日本体操協会 「研究部報 No50」1982. P2
 注33 日本体操協会 「研究部報 No1」1982. P4
 注34 前掲論文 注32 P2
 注35 前掲論文 注31 P84
 注36 前掲論文 注32 P15～106 “男子種目別の新技の出現とその変遷”
 注37 日本体操協会 「研究部報 No40」

引用文献及び参考文献

- 1 R.J.Fisher “The Search for Sporting Excellence” ICSSPE, 1990
- 2 J.A.Kane, R.J.Fishr “Gifftedness in Sport” The Sport Council, 1979
- 3 B.J.Rees “The effect of Intensive Training of Young Athletes” The Sport Council, 1986
- 4 J.Riordan “Soviet Sport – Background to the Olympics” Basil Blackwell Publisher, 1980
- 5 G.Erbach “Koperkultur und Sport” VEB – Institut Leipzig
- 6 岸野雄三、多和健雄代表、「スポーツの技術史序説」大修館書店、1972年
- 7 猪飼道夫代表、「種目別現代トレーニング法」大修館書店、1968
- 8 今村嘉雄、宮畑虎彦代表、「新修体育大事典」不味堂、1976
- 9 日本体育協会・スポーツ科学委員会 「VoⅡ 競技種目別競技力向上に関する研究」
 一第4報一昭和55年度（1980）日本体育協会スポーツ・科学研究報告
- 11 日本体育協会・競技力向上委員会・スポーツ科学委員会：「NoⅤ 競技力向上に関するスポーツ
 カリキュラムの研究開発」一第1報一昭和63年度（1988）日本体育協会スポーツ医・科学研究
 報告
- 13 日本体育協会・日本オリンピック委員会：「NoⅤ スポーツタレントの発掘方法に関する研究」
 平成元年（1989）日本体育協会スポーツ医・科学研究報告
- 14 同上 1990年、VoLⅠ、VoⅠⅡ 1991年 VoⅠⅠ、VoⅠⅡ
- 15 岸野雄三 「近代スポーツ年表」 大修館書店 1973年
- 16 古藤高良 「陸上競技指導ハンドブック」 1975
- 17 金子明友 「体操競技のコーチング」 大修館書店 1974
- 18 小野泰男編著 「体操日本栄光の物語」 日本体操協会 1972
- 19 日本体操協会 「研究部報」 1号～50号